

# 湖北省襄樊市王坡遺跡における 墓葬の変遷とその背景

小 澤 正 人

## はじめに

春秋戦国時代の戦乱は秦の統一により收拾された。統一後の秦は短命に終わるが、広大な領域を統治する帝国は漢へと引き継がれ、前後400年にわたる統一王朝の時代が始まることになる。この秦漢帝国による統治の実態を明らかにすることは、中国古代史研究の重要なテーマとなっている。

従来このテーマへのアプローチは『史記』・『漢書』などの正史を資料として、主に制度的な面から行われてきた。そのため研究の視点は中央政府からのものが中心であり、実際の統治がどのように行われたかについては十分な検討がなされてこなかった。しかし1970年代以降次々と出土した木簡・竹簡などの文字資料により、地域ごとの統治の実態が明らかになってきた。しかしこれら木簡・竹簡もその材質の関係から出土は希であり、現状では地域的な偏在が生じている。そこで筆者が注目したのが秦漢時代の墓葬である。

中国では近年の経済発展に伴い考古学調査が増加しており、秦漢墓の調査もほぼ全国で行われている。中国古代において墓葬は死者の埋葬の場であるとともに、死者の社会的な身分が反映される場所であり、そこには国家による統治のあり方が反映していることが指摘されている<sup>1)</sup>。従って墓葬のあり方を検討することで、秦漢帝国による地方統治の実態を明らかにできると考えられる。

このような視点から筆者はこれまでも論考を発表してきたが、本稿もこのような筆者の秦漢墓研究の一環をなすものである<sup>2)</sup>。本論文では湖北省襄樊市王坡遺跡を取り上げる。この遺跡を取り上げたのは、戦国時

代後期から漢代にかけての墓葬が調査されていることから、当該時期の墓葬の変遷を明らかにすることができ、それを基に秦漢帝国の地方統治の実態を明らかにすることが期待できるためである。以下まず王坡遺跡の概要をみてみたい。

## 1 王坡遺跡の概要

王坡遺跡は湖北省北部、河南省との境に位置する襄樊市にある。襄樊市は漢水中流域の主要都市であり、南陽盆地の南端にあたっている。王坡遺跡はこの襄樊市のうち漢水北岸にある襄陽地区の北部にあり、春秋戦国時代から前漢時代にかけてのこの地域の中心都市の跡とされる鄧城遺跡の北部に立地している。

王坡遺跡は1960年代の遺跡分布調査で発見されており、当初は後漢時代の墓地とされた。しかし1973年に土取によって春秋戦国時代の墓葬が発見されたことで、複数の時代にまたがる遺跡であることが予測された。2000年には高速道路建設が決まり分布調査が行われ、遺跡の範囲が確定された。そして湖北省文物考古研究所、襄樊市考古隊、襄陽区文物管理所による合同調査隊が組織され、2001年4月から2002年11月にかけて発掘調査が行われたのである。調査地区内には4カ所の墓地が含まれており、発掘総面積は85000㎡、発掘された墓葬は176基にのぼり、そのうち春秋戦国時代から漢代にかけての墓葬は173基であった。調査終了後整理作業が行われ、2005年には報告書が刊行されている<sup>3)</sup>。

本稿ではこの刊行された報告書を資料として扱う。対象とする時代は戦国時代後期後半から前漢時代中期前半までとし、検討にあたっては報告書の編年を基に、戦国後期後半、秦、前漢前期前半、前漢前期後半、前漢中期前半の時期区分を用いることとする<sup>4)</sup>。

次に各時期ごとの墓葬の具体的な内容を検討してみたい。

## 2 各時期の飲食器と器物模型

墓葬は、埋葬施設と副葬品から構成される。このうち本稿で対象とする時期の埋葬施設は堅穴木槨木棺または堅穴木棺であり、基本的には変化していない。従って埋葬施設は検討の対象から外すこととする。また

副葬品についても、出土例が少ないものは除外し、出土例の多い飲食器と器物模型を検討の対象としたい。飲食器または器物模型を出土した墓葬は152基で、各墓葬ごとの出土品は表1にまとめて提示してある。この表では飲食器を陶器、青銅器・鉄器、漆器に分け、出土数の多い陶器については、その機能から煮沸器、供膳器、貯蔵器に分けてまとめてある。以下、各時期ごとの出土品を見てみたい。

#### (1) 戦国後期後半（第1図：1～11）

戦国時代後期で検討の対象となる墓葬は39基である。副葬された飲食器には青銅器・漆器・陶器・鉄器がある。副葬品の中心は陶器で、漆器には完形品がなく、痕跡が確認されたのみである。出土した器種の機能に注目すると、煮沸器・供膳器・貯蔵器に分類できる。以下、この分類に従って、それぞれの内容を見てみたい。

煮沸器には鼎、釜、釜がある。鼎には鉄器（1）、陶器（2・3）がある。鼎は本来儀礼用の青銅器、いわゆる青銅礼器であり、鉄器や陶器の鼎はその模倣器である。また鼎には脚部が長いもの（1・2）と短いもの（3）があるが、前者は戦国時代楚で流行した青銅鼎の模倣、後者は秦の青銅鼎の模倣である。釜・釜は日常生活で用いられた日用器で、釜は青銅器（6）と陶器（7）、釜は陶器（8）が出土している。

供膳器では漆器と陶器が出土している。器種には盒（4）、盂（9）、豆（10）、耳杯、奩がある。このうち盒については漆器と陶器があるが、耳杯と奩は漆器のみ、他は陶器のみである。陶器の盒は漆器の模倣と考えられる<sup>5)</sup>。豆・盆は日用器である。貯蔵器には陶器の壺（5）、罐（11）がある。このうち壺は、戦国時代楚の青銅器を模倣したものと考えられる。

#### (2) 秦（第1図12～31）

秦代では57基が対象となる。副葬された飲食器には青銅器・漆器・陶器があり、中心はやはり陶器である。漆器は図示できるものがなかった。

煮沸器では鼎が多く、青銅器（12・14・15）、陶器（21・22）、鉄器がある。このうち青銅製の鼎には脚部が長い楚系（12）と短い秦系（14）がある。模倣陶器もこれに対応しており、21は楚系の模倣、22は秦系の模倣である。15は戦国時代以降に長江以南、特に嶺南地方で流行した越式鼎である。また鉄製の鼎は破損が激しく、図示できるものがな

かった。日用器では陶器の盃(26)、釜(27)が出土している。

供膳器には盒(23・24)、盂(28)、豆(29)、匱(16・17)、耳杯、奩、盤がある。匱は青銅器、盒は漆器と陶器、耳杯、奩、盤は漆器のみで、その他は陶器のみである。このうち17の匱は秦から漢にかけて流行する型式である。

貯蔵器には青銅器と陶器がある。青銅器には壺(13)、鈇(18)、蒜頭壺(19)、蒜頭扁平壺(20)があり、壺については模倣陶器(25)も出土している。出土した貯蔵器のうち壺は楚系、蒜頭壺、蒜頭扁平壺は秦系の青銅器である。日用器は罐(30)、平底甕(31)が出土している。

### (3) 前漢前期前半(第2図1～14)

前漢前期前半では9基が対象となる。飲食器には青銅器・漆器・陶器・鉄器があるが、出土品の中心は陶器で、漆器は痕跡のみであった。

煮沸器では鼎が多く、青銅器(1・3)、その模倣陶器(7・8)、鉄器(2)が出土している。このうち青銅器には、先行する各時期同様、楚系(1・2)と秦系(3)があり、模倣陶器の鼎にも楚系(7)と秦系(8)が認められる。この他の煮沸器としては青銅器の盆(4)が出土している。

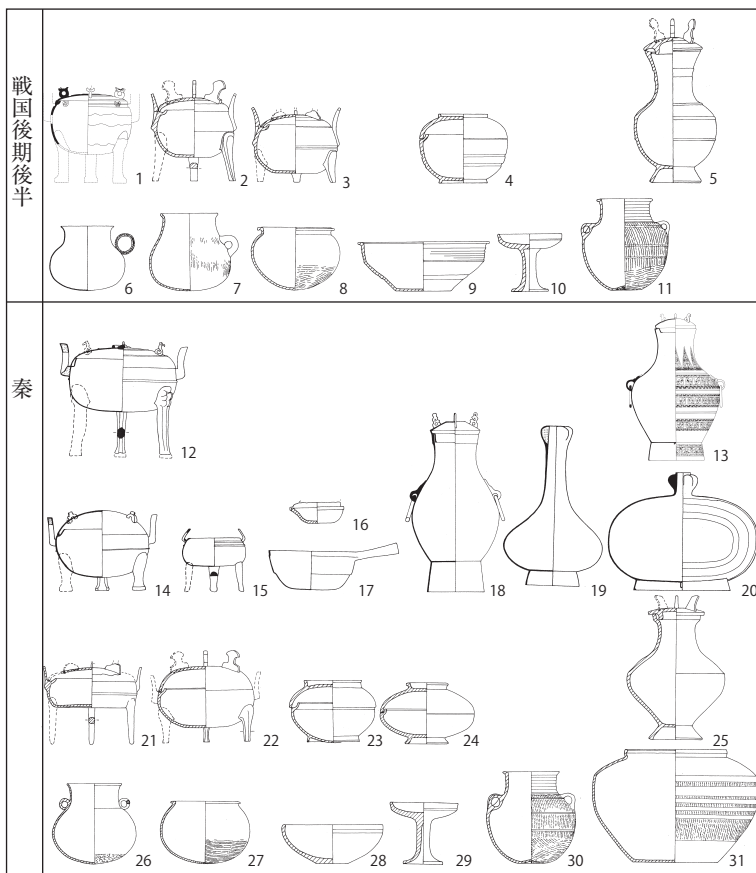
供膳器には盒(10)・鏝壺(9)・豆がある。鏝壺は青銅製品の模倣器である。貯蔵器には青銅器と陶器がある。器種には鈇(5)、蒜頭壺(6)、繭型壺(12)、罐(14)、甕(13)などがある。蒜頭壺は青銅器のみ、鈇には青銅器と模倣陶器があり、他は陶器のみである。繭型壺は秦系の器種である。

また実測図はないが、この時期には器物模型の竈が新たに出土している。

### (4) 前漢前期後半(第2図15～24)

前漢前期後半で対象となるのは24基で、青銅器・漆器・陶器の飲食器が出土している。漆器は痕跡のみが検出されており、図化できるものはなかった。

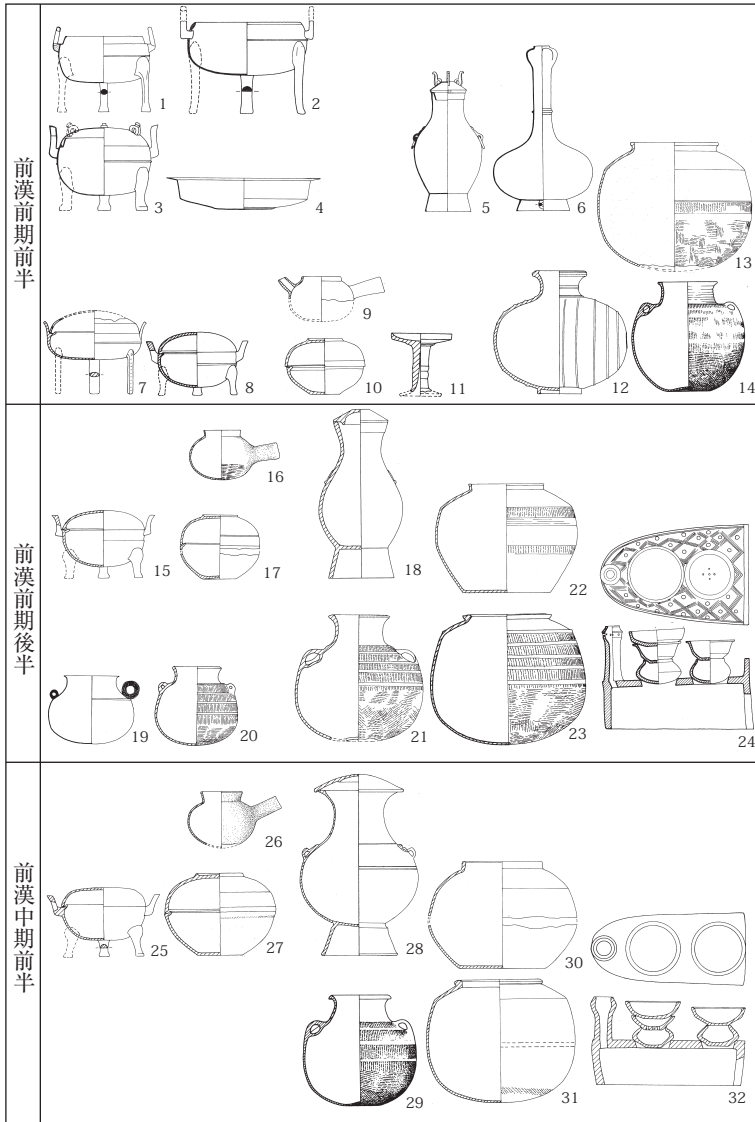
煮沸器には鼎(15)、盃(19・20)、銅、釜がある。鼎には陶器と鉄器があるが、鉄器は破損が激しく形状は不明である。陶器は秦系の鼎を模倣したもののみで、楚系青銅器やその模倣陶器は姿を消している。盃・銅・釜はいずれも日用器で、盃は青銅器(19)と模倣陶器(20)が出土



第1図 王坡遺跡出土飲食器の変遷 (1) (S=1/16)

している。丸底で腹部が浅い銅は青銅器のみ、釜は鉄器のみが出土している。

供膳器では前期前半同様、盒 (17)、鏝壺 (16)、耳杯、奩、豆が出土している。このうち耳杯、奩、豆は漆器のみ、盒は漆器と陶器があり、鏝壺は陶器のみである。貯蔵器は陶器のみで鈚 (18)、罐 (21)、平底甕 (22)、甕 (23) が出土している。出土した器種の中で鈚のみが青銅器模倣陶器で、他は日用器である。この他、器物模型の竈 (24) が出土している。



第2図 王坡遺跡出土飲食器の変遷(2) (S=1/16)

(5) 前漢中期前半(第2図25~32)

前漢中期前半では23基が対象となる。飲食器では漆器と陶器が出土

している。漆器はやはり痕跡のみである。

煮沸器は鼎、釜、釜が出土している。鼎には陶器（25）と鉄器があるが、鉄器は図示できるものがなかった。釜・釜はいずれも鉄器のみが出土している。供膳器には盒（27）、釜壺（26）、耳杯が出土している。前漢前期後半同様、盒は漆器と陶器、釜壺は陶器、耳杯は漆器のみが出土している。貯蔵器としては鍾（28）、罐（29）、平底甕（30）、甕（31）が出土している。鍾は漢代以後に流行する青銅器の壺である。器物模型では竈が出土している（32）。

以上、各時期ごとに出土した飲食器と器物模型を見てきたが、次に墓葬における出土状況、特に器種セットに注目して、副葬された飲食器との器物模型の変遷をまとめてみたい。

### 3 飲食器との器物模型の変遷

本稿で対象とする副葬品のうち、器物模型は前漢以降普遍的に副葬されるようになるものであり、本稿で扱った期間を通して副葬されたのは飲食器である。そこで以下飲食器の変遷を中心に検討してみたい。

副葬された飲食器はその機能から煮沸器・供膳器・貯蔵器に分類される。対象とした152基の墓葬のうちこの三つの機能を組み合わせたセットを出土した墓葬は92基あり、全体の60.5%を占めており<sup>6)</sup>、飲食器の組み合わせとしては最も多い。従ってこの煮沸器・供膳器・貯蔵器を組み合わせたセットが、副葬飲食器の基本的な構成と考えられる。以下検討を進めるにあたっては、各機能ごとの器種の変化に注目してみたい。

戦国後期後半に出土した飲食器は陶器を中心とするが、器種を見ると青銅器や漆器などを模倣した明器である鼎、盒、壺と、実用の日用器である釜、釜、盂、罐の2種類に分けられる。この他の器種としては豆があるが、この器種については模倣器・実用器の両者の可能性が考えられることから、この分類からは外しておく。表1から煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットを構成した墓葬での模倣器と実用器の組み合わせを見ると、模倣器は鼎・盒・壺のようにそれのみでセットを構成しているが、日用器は単独ではセットを構成せず、模倣器と同伴している。このことから戦国後期後半では模倣器のセットが基本となっていることがわ

表1 王城遺跡墓葬出土飲食器・模型明器一覧

注：(1) 器物名の後ろの数字は出土点数を表す

(2) 青銅器・鉄器欄では鉄器には器物名の前に「鉄」をつけ、青銅器には何もつけていない。

| 墓葬<br>番号 | 陶器  |         |        | 青銅器・鉄器 | 漆器     | 器物模型 |
|----------|-----|---------|--------|--------|--------|------|
|          | 煮沸器 | 供膳器     | 貯蔵器    |        |        |      |
| 戦国後期後半   |     |         |        |        |        |      |
| 2        | 鼎   | 盒       | 壺      |        |        |      |
| 7        | 鼎   | 盒・豆     | 壺      |        |        |      |
| 9        | 釜   |         | 罐      |        |        |      |
| 12       | 鼎   | 盒       | 壺      |        | 耳杯     |      |
| 14       | 鼎   |         | 壺・小壺・罐 |        |        |      |
| 18       | 釜   | 孟       | 壺      |        |        |      |
| 23       | 鼎 2 | 盒 2     | 壺 2    |        |        |      |
| 24       | 釜   |         |        |        |        |      |
| 26       |     |         | 罐      | 鉄鼎     | 盒・耳杯 2 |      |
| 29       | 釜   |         | 壺      |        |        |      |
| 31       | 鼎 2 | 豆       | 壺 2    |        |        |      |
| 37       | 鼎   | 盒・豆     | 壺      |        |        |      |
| 38       | 鼎   | 豆・豆     | 壺      |        |        |      |
| 46       | 鼎 2 |         | 壺 2    |        |        |      |
| 49       | 鼎 2 | 盒 2     | 壺 2    |        |        |      |
| 50       | 鼎   | 盒       | 壺      |        |        |      |
| 57       | 釜   | 盒・孟     | 壺      |        | 盒      |      |
| 60       | 鼎   | 盒       | 壺      |        |        |      |
| 61       | 鼎 2 | 盒 2・豆 3 | 壺 2    |        |        |      |
| 62       | 鼎   | 盒・豆 3   | 壺・罐    |        |        |      |
| 68       | 鼎・釜 |         | 壺      |        |        |      |
| 79       | 鼎 2 | 盒 2     | 壺 2    |        | 盒      |      |
| 88       | 鼎・釜 | 盒・豆 5   | 壺・罐    |        |        |      |
| 89       | 鼎   | 盒       | 壺      |        |        |      |
| 93       | 釜   |         |        |        |        |      |
| 102      | 鼎   | 盒・豆 5   | 壺      |        |        |      |
| 110      | 鼎 2 | 盒       | 壺 2    |        | 盒・奩    |      |
| 111      | 鼎   |         | 壺 2・罐  | 釜      |        |      |
| 113      | 鼎   | 盒・豆 8   | 壺      |        |        |      |
| 114      | 鼎 2 | 盒 2・豆 4 | 壺 2    |        |        |      |
| 118      |     | 孟       | 罐 2    |        |        |      |
| 127      | 鼎 2 | 盒 2     | 壺 2    |        |        |      |
| 128      | 鼎 2 | 盒 2     | 壺 2    |        | 盒      |      |
| 130      | 鼎   | 盒 2・豆 6 | 壺 2    |        |        |      |
| 132      | 鼎   | 盒・豆 3   | 壺      |        |        |      |
| 135      | 鼎   | 盒       | 壺      |        |        |      |
| 144      |     |         | 罐 2    |        |        |      |
| 145      | 鼎   |         | 壺      |        |        |      |



| 墓葬<br>番号 | 陶器  |         |       | 青銅器・鉄器  | 漆器       | 器物模型 |
|----------|-----|---------|-------|---------|----------|------|
|          | 煮沸器 | 供膳器     | 貯蔵器   |         |          |      |
| 150      | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 秦        |     |         |       |         |          |      |
| 4        | 釜   | 孟       | 罐     |         | 耳杯       |      |
| 5        | 釜   | 孟       |       |         |          |      |
| 6        |     | 孟・豆     | 壺・罐   |         |          |      |
| 8        |     |         | 罐     |         |          |      |
| 10       |     | 孟       | 罐     |         | 盒        |      |
| 13       |     | 盒       | 罐 2   |         |          |      |
| 15       |     | 孟 2     | 罐     |         |          |      |
| 16       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 17       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 19       | 釜   | 盒・豆 2   | 壺     |         |          |      |
| 20       | 釜   | 孟       | 罐     |         |          |      |
| 21       | 釜 2 | 孟       |       |         |          |      |
| 25       | 釜   |         | 壺     |         |          |      |
| 27       |     | 豆・豆 4   | 壺・罐   |         |          |      |
| 28       | 釜   |         | 罐     |         |          |      |
| 30       | 鼎 2 | 盒 2     | 壺・壺   |         |          |      |
| 32       |     |         | 壺 2・罐 |         | 耳杯       |      |
| 34       |     | 豆 4     |       | 鼎 2・蒜頭壺 |          |      |
| 36       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 40       | 釜   |         | 罐     |         |          |      |
| 41       | 鼎   | 豆 4     | 壺     |         |          |      |
| 42       | 鼎   |         | 壺     |         |          |      |
| 43       | 鼎   |         | 壺     |         |          |      |
| 44       | 釜   |         |       |         |          |      |
| 45       | 釜   |         | 環     |         |          |      |
| 56       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 58       |     | 孟       | 罐 2   |         |          |      |
| 59       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 64       | 鼎   | 盒       | 壺     |         | 耳杯       |      |
| 65       |     | 孟       | 壺・罐   |         |          |      |
| 73       |     | 豆       |       | 鼎 2・鈔 2 | 盒・耳杯 2・盤 |      |
| 74       |     | 豆       | 甕     | 鼎 2・鈔 2 |          |      |
| 87       |     | 豆 5     | 壺 2   | 鉄鼎 2    | 盒        |      |
| 90       | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |
| 91       | 鼎   | 盒・豆 2   | 壺     |         |          |      |
| 94       |     |         | 壺     |         |          |      |
| 95       | 釜   |         | 壺     |         |          |      |
| 96       | 釜   | 孟 2・豆 2 | 罐     |         |          |      |
| 98       | 釜   |         | 罐     |         |          |      |
| 99       |     |         | 罐     | 蒜頭壺     |          |      |
| 107      | 釜   |         | 罐     |         |          |      |
| 108      | 鼎   | 盒       | 壺     |         |          |      |

| 墓葬<br>番号 | 陶器  |         |         | 青銅器・鉄器    | 漆器       | 器物模型 |
|----------|-----|---------|---------|-----------|----------|------|
|          | 煮沸器 | 供膳器     | 貯藏器     |           |          |      |
| 115      | 鼎   |         | 壺 2     | 鉄鼎        |          |      |
| 116      | 釜   |         | 罐       |           |          |      |
| 117      | 釜   | 孟       | 罐       |           |          |      |
| 119      | 釜   |         | 罐       |           |          |      |
| 120      | 釜   |         | 壺       |           |          |      |
| 121      | 鼎   | 盒       | 壺       |           |          |      |
| 122      |     |         | 罐 3     |           |          |      |
| 123      | 釜   |         | 罐 2     |           |          |      |
| 124      |     |         | 壺・罐     | 鉄鼎        |          |      |
| 125      | 釜   |         |         |           |          |      |
| 134      |     |         |         | 鼎 3・壺・鈚 2 |          |      |
| 142      | 鼎   | 盒・豆 3・孟 | 壺 2     |           |          |      |
| 143      | 釜   | 孟       | 罐       |           |          |      |
| 146      |     |         |         | 鼎・蒜頭壺     |          |      |
| 148      | 釜   |         | 罐       |           |          |      |
| 前漢前期前半   |     |         |         |           |          |      |
| 35       |     | 豆 4     | 壺 2     | 鼎 2・鈚 2   |          |      |
| 39       | 鼎   | 盒       | 壺・罐     |           |          |      |
| 82       |     |         | 罐       | 鼎・蒜頭壺・鉄鼎  |          |      |
| 92       |     | 鍾壺      | 甕       | 鼎 2・鈚 2   |          | 甗    |
| 109      | 鼎   |         | 壺       | 鼎・盤・蒜頭壺   |          |      |
| 112      |     |         | 壺・罐・繭型壺 | 鉄鼎        |          |      |
| 147      |     |         |         | 鼎・鈚       |          |      |
| 157      |     |         | 壺・罐     | 鼎         |          |      |
| 159      |     |         | 罐 2     |           |          |      |
| 前漢前期後半   |     |         |         |           |          |      |
| 11       | 鼎   | 盒       | 鈚・罐     |           | 盒・耳杯 2   | 甗    |
| 48       | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2・甕   |           |          | 甗    |
| 51       | 鼎・釜 | 盒・鍾壺    | 鈚・罐     |           |          |      |
| 52       | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2     |           |          | 甗    |
| 54       | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2     |           |          | 甗    |
| 66       |     |         | 甕       | 鉄釜        | 盒・耳杯 2・豆 | 甗    |
| 69       | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2・罐   |           |          | 甗    |
| 71       | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2     |           |          |      |
| 75       | 釜   |         | 罐 2     |           | 耳杯       |      |
| 78       | 釜   |         | 罐       |           | 盒・耳杯・奩   |      |
| 83       | 鼎   | 盒       | 鈚・甕     | 鉄釜        |          | 甗    |
| 100      | 鼎   | 盒       | 鈚       |           | 盒・耳杯 2   | 甗    |
| 103      | 鼎 2 | 盒 2     | 鈚 2     |           |          | 甗    |
| 106      |     |         | 甕       | 釜・銅       |          | 甗    |
| 133      | 鼎   | 盒       | 鈚・罐     |           |          | 甗    |
| 140      |     |         | 壺・罐     | 鉄鼎 2      |          |      |
| 151      | 釜   |         | 甕       |           |          | 甗    |
| 152      | 鼎   | 盒       | 鈚       |           |          | 甗    |

| 墓葬<br>番号 | 陶器  |       |          | 青銅器・鉄器 | 漆器    | 器物模型 |
|----------|-----|-------|----------|--------|-------|------|
|          | 煮沸器 | 供膳器   | 貯蔵器      |        |       |      |
| 153      | 鼎   | 盒     | 罐2・罐2    | 鉄釜     |       | 竈    |
| 155      |     |       | 甕        | 釜      |       | 竈    |
| 164      | 鼎・釜 | 盒・小盒  | 鈚・罐      |        |       |      |
| 165      | 鼎   | 盒     | 鈚・罐・罐2・甕 |        |       | 竈2   |
| 166      | 鼎2  | 盒     | 鈚2・罐・甕   |        |       | 竈    |
| 167      | 鼎   | 盒     | 鈚・罐      |        |       | 竈    |
| 前漢中期前半   |     |       |          |        |       |      |
| 22       | 鼎2  | 盒2    | 壺2・罐2    |        |       | 竈    |
| 33       | 鼎   | 盒     | 壺・罐      |        | 盒     |      |
| 53       | 鼎   | 盒     | 壺        |        |       | 竈    |
| 63       |     |       |          |        |       | 竈    |
| 67       | 鼎2  | 盒2・鍤壺 | 壺2       |        |       | 竈    |
| 72       | 鼎2  | 盒2    | 壺2       |        | 耳杯    | 竈    |
| 76       | 鼎2  | 盒2    | 壺2       |        |       |      |
| 77       |     | 盤     | 甕        | 鉄鼎     |       |      |
| 80       | 鼎   |       | 罐        |        | 盒・耳杯  |      |
| 81       | 鼎2  | 盒2    | 壺2・罐     |        |       | 竈    |
| 84       | 鼎2  | 盒2    | 壺2       |        |       | 竈    |
| 85       |     |       | 罐・甕      |        | 耳杯2   | 竈    |
| 86       |     |       | 罐・甕      |        | 盒・耳杯2 | 竈    |
| 97       | 鼎2  | 盒2    | 壺2       |        |       |      |
| 104      | 鼎2  | 盒2    | 壺2       |        |       | 竈    |
| 105      | 鼎2  | 盒2・鍤壺 | 壺2・壺     |        |       |      |
| 126      | 鼎   | 盒     | 壺        |        |       |      |
| 131      | 鼎   |       | 罐        |        | 耳杯    |      |
| 154      | 鼎2  | 盒2    | 壺2・罐     |        |       | 竈    |
| 160      |     |       | 罐        | 鉄釜     |       |      |
| 168      |     |       | 甕        | 鉄釜     |       | 竈    |
| 169      | 鼎   | 盒     | 壺・罐      |        |       |      |
| 170      | 鼎   | 盒     | 壺・罐      |        |       |      |
| 171      | 鼎   | 盒     | 壺        |        |       | 竈    |

かる。この模倣器のセットでは煮沸器の鼎、供膳器の盒、貯蔵器の壺を含むセットを副葬した墓葬が85.8%（24基）で最も多いことから、この組み合わせが戦国後期後半の基本的な器種構成ということになる。この中で鼎・壺は青銅器の模倣、盒は漆器の模倣である。このうち鼎・壺は、周代から祭祀・儀礼に使われた青銅礼器の系譜を引くものであることから、以下、このような青銅礼器の器種を含む副葬品セットを「礼器系セット」と呼ぶこととする。これに対して実用の日用器である煮沸器の釜・釜、供膳器の盂、貯蔵器の罐のセットについては、「日用器セッ

ト」と呼ぶことにする。戦国後期後半では礼器系セットが基本であり、鼎・盒・壺といった器種のセットで構成されている。

さらにこの礼器系セットのなかの青銅器模倣陶器に注目すると、そこには楚系と秦系の2つの系譜があることがわかる。例えば脚部が長い鼎や壺は楚系青銅器の模倣であり、脚部が短い鼎は秦系青銅器の模倣である。楚の領域であった襄樊地域は戦国後期後半に秦に占領され、その統治下に入る。模倣陶器に楚系青銅器と秦系青銅器という2つの系譜があるのは、秦の占領により新たに秦系青銅器が流入した結果と考えられる。なお日用青銅器においても本来四川地域を分布域とする釜が出土しているが、これも秦の占領によりもたらされたものと考えられる<sup>7)</sup>。

次の秦代は、青銅器の出土が増えるなど器種レベルでの入れ替わりがあるが、基本的には戦国後期後半の様相を継承している。

まず副葬飲食器のセットを見ると、煮沸器・供膳器・貯蔵器をセットで出土した墓葬のうち、礼器系セットが15基、日用器セットが5基となっており、秦代においてもやはり礼器系セットが中心となっていることがわかる。また礼器系セットを構成する器種も戦国後期後半同様に鼎・盒・壺である。さらに出土した青銅器やその模倣陶器には長脚の鼎・壺といった楚系青銅器と短脚の鼎・蒜頭壺・蒜頭扁壺・匱といった秦系青銅器が混在していることも同じである。

前漢前期前半は墓葬が9基しか確認されておらず全体的な様相がわかりづらくはあるが、基本的には大きな変化は見られない。9基の墓葬のうち、煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットを構成する墓葬が3基で、このうち2基は礼器系であることから、礼器系の組み合わせが多い傾向が認められる。また楚系と秦系の青銅器が混在している点にも変化は無い。

ただしこの時期には見逃すことのできない変化も現れている。その一つとして貯蔵器の模倣陶器から壺がなくなり、代わりに鈇が副葬されるようになった点が挙げられる。壺は楚系青銅器の模倣と考えられるのに対して、鈇は戦国後期から秦漢代にかけて普及した器種であることから、壺から鈇への変化は、楚系青銅器の退潮が始まったことを示すものと考えられる。また僅か1例ではあるが器物模型の竈が出土したことも注目される。これまで器物模型は出土しておらず、そのため竈の出土は新たな分類に属する副葬品の出現を意味するものであり、注目すべき変化である。

総じて言えば、前期前半は基本的には秦代を継承しながらも、それは異なる要素が姿を見せ始めた時期、と位置づけることができる<sup>8)</sup>。

次の前期後半では24基の墓葬のうち煮沸器・供膳器・貯蔵器の礼器系セットを副葬した墓葬が17基(70.8%)、日用器セットを出土した墓葬が2基で、引き続き礼器系セットが副葬飲食器の中心となっていることがわかる。器種構成は鼎・盒・鉢が基本となっており、前期前半の器種セットが継続している。また竈は18基(75.0%)の墓葬から出土しており、副葬品として定着している。この時期の大きな変化としては、楚系青銅器やその模倣陶器が出土しなくなった点を挙げるができる。楚系青銅器やその模倣器は戦国後期後半以来出土しており、この変化は戦国時代以来の要素がこの時期に消失したことを意味している。

中期前半では23基の墓葬のうち、煮沸器・供膳器・貯蔵器の礼器系セットを出土した墓葬が16基(69.6%)と最も多い反面、日用器セットを出土した墓葬は検出されていない。器種では鉢の出土例がなくなり、これに代わって漢代に流行する鍾が出土するようになっている。

以上の変化をまとめると次のようになる。

戦国後期後半では煮沸器の鼎、供膳器の盒、貯蔵器の壺で構成される礼器系セットと煮沸器の釜・釜、供膳器の盂、貯蔵器の罐で構成される日用器系セットがあるが、前者を副葬した墓葬が圧倒的に多い。礼器系セットのうち青銅器を模倣した器種には楚系と秦系の2つの系譜がある。このような礼器系セットを中心とすること、青銅器やその模倣器には楚系と秦系があるといった様相は次の秦代にも引き継がれており、器種に若干の増減があるものの、基本的には大きな変化は認められない。

前漢前期前半でも礼器系セットを基本とすること、青銅器には楚系と秦系が混在するという基本的なあり方に変化は無い。ただし礼器系セットの基本器種であった壺が副葬されなくなっており、楚系青銅器が姿を消し始めている。逆に新たに器物模型の竈が副葬されており、副葬品の構成に変化が現れている。従って前期前半は基本的には秦代を受け継ぎながら、新たな変化が始まった時期と位置づけられる。

この前期前半に始まった変化は、次の前期後半では更に進展する。楚系青銅器やその模倣器は出土しなくなり、戦国時代以来の器種が姿を消す。前期前半に現れた竈は、前期後半では75%の墓葬から出土しており、

完全に定着し、なおかつ主要な副葬品となっている。

次の中期前半では日用器系セットを副葬した墓葬が全くなく、戦国後期以来の礼器系と日用器系という副葬飲食器の枠組みが崩れている。個別の器種では鋤が副葬されなくなり、代わりに漢代に現れる鍾が出土するようになっていく。つまりこの時期に副葬品は戦国後期・秦までの構成から離脱し、新しい漢代の構成へと移行しているのである。

以上の検討から、襄樊地域では戦国後期後半に鼎・盒・壺を基本とする礼器セットが成立するが、その後の変化は緩慢であり、政治的には秦から漢へという大きな出来事があったにもかかわらず、徐々に要素が入れ替わっていくような変化のあり方を示すことが確認できた。

最後に、このような変化をもたらした背景について考えてみたい。

### 3 副葬品の変化をもたらした背景

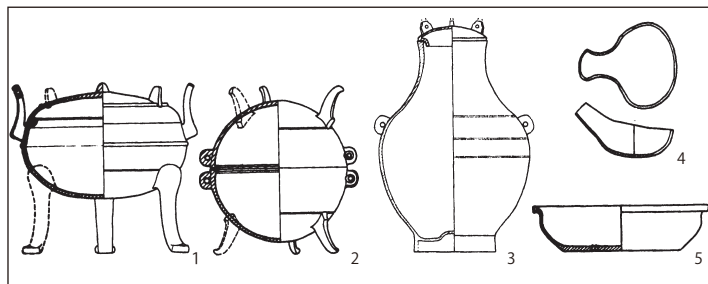
まず副葬品のなかで大きな比重を占めている青銅飲食器を取り上げてみたい。

先秦時代の青銅飲食器は、「青銅礼器」と呼ばれ、西周時代以来それを所持し儀礼・祭祀を行う者の権威を象徴的に表現する威信材であり、儀礼・祭祀を行う上で必要な煮沸器・供膳器・貯蔵器（酒器）・盥器のセットを構成していた。戦国時代の楚では煮沸器の鼎（第3図：1）、供膳器の敦（第3図：2）、貯蔵器の壺（第3図：3）、盥器の盤（第3図：4）・匱（第3図：5）といった器種構成が一般的であった。

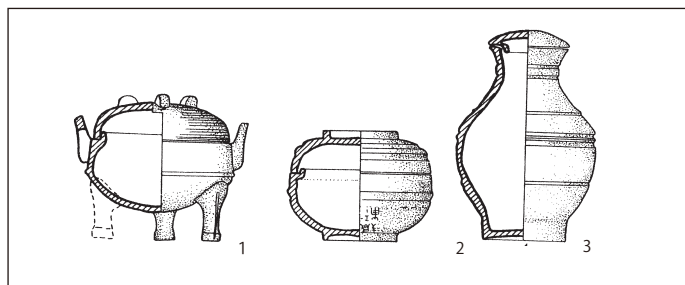
戦国後期後半の秦の占領は青銅礼器により自らの社会的な地位を表現していた楚国の支配階層を消滅させることになった。そのためこれら支配層に依存していた楚系青銅器の副葬品のセットも姿を変えることになる。具体的には供膳器の敦と盥器が副葬されなくなり、代わりに鼎・盒・壺の組み合わせが成立する。ここで成立する鼎・盒・壺のセットは、秦の中心地である関中地区で典型的に見られる構成である（第4図）。つまり襄樊地域では秦の副葬飲食器のセットをほぼそのまま受け入れたのである。また秦では青銅飲食器は儀礼祭祀に使われる「礼器」としての性格が失われ、単なる高級な容器としての役割を持つに過ぎなくなってしまうため<sup>9)</sup>、儀礼を行ううえで重要な盥器が欠落してしまうのだが、この点も襄樊地域はそのまま受容している。このように秦の副葬飲食器

がそのまま移植されたような様相は、襄樊地域における秦の統治がいかに強力であったかを示している。

このような状況は襄樊地域の西側に位置する老河口地域でも認められており、一定の広がりを持っている<sup>10)</sup>。しかし襄樊地域の南側の江漢地域では釜・盆・罐といった日用陶器を中心とする組み合わせが優位に立っており<sup>11)</sup>、襄樊や老河口と言った地域とはかなり異なった様相を示している。この違いからは楚系青銅器のセットが崩れ、新たな副葬飲食器のセットが成立する中で、地域により違いがあったことがわかる。つまり襄樊地域のように秦の影響を強く受けた地域がある反面、江漢地域のようにその影響をあまり受けていない地域が存在していたのである。そこには秦の支配の中でも独自性を保持するという、地域文化の伝統の強さを認めることができる。秦の影響力が強い襄樊地域で楚系青銅器の要素が前漢前期前半まで影響を残していたことも、このような伝統的な文化の影響力の反映として捉えることができる。工藤元男は秦が占領し



第3図 襄樊市付崗 145号墓出土陶器 (S=1/10)



第4図 西安市塔兒坡 28057号墓出土陶器 (S=1/10)

た楚の領域において旧来の楚の伝統を尊重する支配をおこなっていたことを指摘しており<sup>12)</sup>、この指摘は本稿で検討してきた墓葬のあり方にも通じるものがある。

つまり秦による統治は一面において強力に押し進められたわけであるが、同時に以前からの文化伝統を残したものとなっており、その意味では表層的ものに留まっていたとすることができる。

次の秦から前漢への副葬品の変化は緩慢なものであった。政治的には秦から漢へと王朝の交替があったわけだが、それに基づくような急激な変化は認められない。漢は秦の成果をそのまま受け継いだと言われているとおり、墓葬の面でも大きな変化は生じなかったのである。ただし竈や鍾の出現は関中地区とほぼ同時であり<sup>13)</sup>、襄樊地域が依然として関中地区との深い関係にあったことがわかる。このことは関中地区を中心とした漢王朝の文化が着実に襄樊地域にも浸透することを表しており、そこには地域性が弱まり、文化的な統一が進展していく姿を認めることができる。その背景には漢の安定した統治と、そのより社会の基層までの浸透があったことが考えられるのである。

## おわりに

以上、襄樊地域の副葬品の変化を明らかにすることで、この地域の統治がどのように行われてきたのかを検討してきた。襄樊地域では秦代以降王朝の中心地であった関中地区との強い影響関係が認められており、その背景に秦漢帝国の強力な地方統治の存在があったと考えられる。ただし秦の統治は地域の文化伝統を残したものであり、その意味では表層的なものに留まっていた。それに対して漢では着実に文化の一体化が進んでおり、漢の統治の下で文化的な統一性が進む姿を認めることができる。その背景として国家の統治が社会の基盤となる層にまで浸透していったことが考えられるのである。

本稿では前漢時代中期前半までを扱ったわけであるが、前漢時代後期になると各地で磚室墓が出現するようになり、襄樊地域でも多数の調査例がある<sup>14)</sup>。次の課題は襄樊地域でどのように磚室墓が受容されるかであるが、この点については稿を改めて論じてみたい。



付記：本稿は2011年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「秦漢墓の成立からみた秦漢帝国の支配体制の研究」（研究代表者小澤正人）による研究成果の一部である。

## 注

- 1) この点については町田章・上野祥史らが論じている。  
町田章「華北地方における漢墓の構造」（『東方学報（京都）』49冊1977年）  
上野祥史「漢墓資料研究の方向性」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集 2003年）
- 2) 小澤正人「長江下流域における戦国墓から漢墓への副葬陶器の変遷」（『アジア流域文化論研究』Ⅱ、2006年）  
小澤正人「荊州高台墓地の構造に関する一考察」（『社会イノベーション研究』第1巻第2号、2006年）  
小澤正人「鳳凰山168号墓から見た前漢初の葬制」（『社会イノベーション研究』第2巻第1号、2006年）  
小澤正人「戦国時代から秦漢時代にかけての四川盆地と川西高原の文化変遷」（『中国考古学』第7号、2007年）  
小澤正人「華中・華南における前漢墓の様相と地域性についての一考察」（『中国考古学』第8号、2008年）  
小澤正人「湖北省老河口市における秦漢時代墓葬の変遷とその背景」（吉村作治先生古稀記念論文賞編集委員会編『永遠に生きる』所収、中央公論美術出版 2013年）  
小澤正人「馬王堆1号墓副葬品からみた漢墓の特質」岡内三真編『技術と交流の考古学』2013年）  
小澤正人「江漢地域における秦墓の成立」（飯島武次編『中華文明の考古学』所収 2014年2月刊行予定）
- 3) 湖北省文物考古研究所・襄樊市考古隊・襄陽区文物管理所『襄陽王坡東周秦漢墓』（文物出版社 2005年 北京）
- 4) 本稿で「戦国後期後半」とした時期は、報告書で「戦国後期」と表記されている時期に相当する。報告書では「戦国後期」を秦による占領以降と位置づけている。秦による襄樊地区の占領は秦昭王28（紀元前279）年とされ、この翌年には楚は都である郢（湖北省江陵県）を秦の将軍白起に占領され、陳（河南省淮陽県）へと遷都を余儀なくされている。湖北省の戦国時代楚墓の編年では、秦による占領を戦国後期の前半と後半の境としている。従って本稿もこれに従い、報告書での「戦国後期」を「戦国後期後半」と表記することにする。なお楚墓の編年については以下の文献を参照。  
荊州地区博物館『江陵雨台山楚墓』（1984年 文物出版社 北京）

- 5) 秦の占領以後の出土する盒については小澤正人「江漢地域における秦墓の成立」(飯島武次編『中華文明の考古学』所収 2014年2月刊行予定)参照。
- 6) 王坡墓地では供膳器に漆器を使っていた例が確認されている。漆器の供膳器を使っていた場合、製品が腐食してしまうと、調査時には煮沸器・貯蔵器製品のみが出土したとして記録されてしまう。王坡遺跡では煮沸器・貯蔵器を出土した墓葬は38基(全体の25%)あり、煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットを出土した墓葬に次いで検出例が多い。上記の供膳器の状況を勘案するならば、このような煮沸器・貯蔵器のみを出土した墓葬の中には本来漆器の供膳器が副葬されていたものもあつたはずであり、そうであれば煮沸器・供膳器・貯蔵器のセットを出土した墓葬の割合はより大きくなる。なお供膳器に漆器を使っていた例は、湖北省雲夢県睡虎地遺跡、江陵県高台遺跡などでも確認されており、一般的な状況であつたと考えられる。詳しくは前掲注4小澤論文参照。
- 7) 釜の動向については小澤正人「戦国時代から秦漢時代にかけての四川盆地と川西高原の文化変遷」(『中国考古学』第7号、2007年)参照。
- 8) なお前期前半には釜・釜などの出土例がないが、次の前期後半には出土例があり、しかも型式的には連続していることから、前期前半の墓葬数が少ないことによる資料的な制約によるものと考えられる。
- 9) 秦の占領による楚系青銅器の変化とその意味については、前掲注4小澤論文参照。
- 10) 老河口地域における副葬飲食器については、小澤正人「湖北省老河口市における秦漢時代墓葬の変遷とその背景」(吉村作治先生古稀記念論文賞編集委員会編『永遠に生きる』所収、中央公論美術出版 2013年)参照。
- 11) 江漢地域における副葬飲食器については、前掲注4小澤論文参照。
- 12) 工藤元男『占いと中国古代の社会』(東方書店 2013)
- 13) 関中地区では前漢前期に竈明器が姿を現している。関中地区における墓葬については、西安市文物保護考古所『西安龍首原漢墓』(西北大学出版社 199年 西安)を参照。また秦・前漢時代では関中地区との関係で、各地の墓制に違いが生まれていることについては、小澤正人「華中・華南における前漢墓の様相と地域性についての一考察」(『中国考古学』第8号、2008年)で言及したことがある。
- 14) 襄樊地域では鶴龍路遺跡や城東街遺跡などで磚室墓が多数発掘されている。これら遺跡の報告については以下の文献を参照。  
襄樊市文物考古研究所編『襄樊考古文集(第一輯)』(科学出版社 2007年 北京)

## 図版出典目録

第1図『襄陽王坡東周秦漢墓』（前掲注3）戦国後期・秦墓

M7 : 1, M9 : 10, M11 : 5, M17 : 23, M18 : 6, M21 : 26, M23 : 2, M29 : 7,  
M37 : 4, M40 : 30, M46 : 19, M56 : 21, M59 : 22, 25, M62 : 3, M74 : 31,  
M96 : 28, M99 : 16・20, M102 : 9, M115 : 12, M130 : 29, M134 : 13・  
14・15・18, M142 : 24, M143 : 27, M146 : 11・17

第2図『襄陽王坡東周秦漢墓』（前掲注3）西漢墓

M11 : 8・10・11・14, M22 : 27, M33 : 29, M39 : 7, M51 : 16, M54 : 15,  
M67 : 26, M71 : 18, M81 : 28, M82 : 1・5・6, M85 : 30・32, M86 : 31,  
M92 : 9・13, M104 : 25, M106 : 19, M109 : 3・4, M112 : 12, M133 : 17,  
M140 : 2, M151 : 20・23, M153 : 24, M155 : 22, M164 : 21

第3図：襄樊市文物考古研究所編『余崗楚墓』（科学出版社 2011年 北京）

第4図：咸 市文物考古研究所『塔兒坡秦墓』（三秦出版社 1998年）